

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：14602
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2009 ～ 2011
 課題番号：21520405
 研究課題名（和文） 相互行為における指示に関する研究

研究課題名（英文） Reference in Interaction

研究代表者 須賀あゆみ(SUGA AYUMI)
 奈良女子大学文学部 准教授
 研究者番号：50283924

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、指示を相互行為の視点から捉えることにより、会話参加者がどのように指示対象の認識・理解を確立するのかを観察し、指示を確立することが会話全体の活動の達成にどのように貢献するのかについて考察することである。日本語会話におけるストーリー・テリングにみられる人物指示に関するいくつかの現象の記述を通して、指示を確立することが単に指示対象を同定するだけでなく会話活動の達成に貢献することを議論した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to observe how participants in conversation establish recognition and understanding of their intended referents, and to discuss how such interactional activities of reference establishment contribute to the achievement of the overall goals of conversation. Through the analysis of person reference in Japanese storytelling, I point out some phenomena which demonstrate that the activities of reference establishment not only refer to persons but also contribute to the achievement of the storytelling.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	110,000	330,000	1430,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、会話分析、相互行為、指示(reference)、指示表現、物語り(storytelling)、人物指示(person reference)、談話

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語学における指示研究

言語学(談話研究)における指示研究では、対象を指示する表現形式の選択要因を解明することが中心的な課題であり、これまでに

様々な枠組みや概念が提案されてきた(Halliday & Hassan(1976)による結束性、Prince(1981, 1992)による情報構造、Grosz *et al.*(1995)によるセンタリング理論、Gundel *et al.*(1992)によるGivenness Hierarchy、Ariel

(1990)によるAccessibility、金水・田窪(1990)による談話管理理論など)。

本研究は、指示(reference)を会話参与者による社会的活動の一環としてみなすことによって、従来談話研究ではあまり注目されてこなかったが自然会話に頻繁に観察される現象(例えば、聞き手が指示対象を認識できるかどうかを会話の進行中に確認しあったり、聞き手の適切な認識を促すために指示をやり直したりする現象)の記述を目指す。また、指示を確立する相互行為が会話全体の組織体系にどのような影響を与えるのかを検討することによって、会話において指示を確立することが、単に指示対象を同定すること以上の役割を果たすことを議論する。

(2) 指示の相互行為的側面

本研究では、指示は次のような相互行為的側面を有するものとみなす。

- (a) 聞き手の知識想定に基づいてデザインされる
- (b) 会話のその場その場の聞き手の反応に応じて行われる
- (c) 言語表現のみならず非言語表現(音調、視線、ジェスチャーなど)を伴う
- (d) 会話活動を遂行するための副次的な活動である
- (e) 対象を指示すること以上のことを成し遂げる

(3) 相互行為的視点による指示研究

上記(a)(b)の側面は、Sacks & Schegloff(1979)によって注目され、指示表現形式の選択指針が提案された。Ford & Fox(1996)は特に(c)の側面に焦点を当て、指示表現形式の修復現象についてミクロな分析を行っている。(d)の側面は、Hayashi(2005)や串田(2008)によって、指示交渉という副次的活動によって阻まれうる会話の進行性がどのように確保されるかについて論じられている。(e)の側面に関しては、Fox(1987)は照応形式(人物名を用いるか照応形を用いるか)の選択と会話の局所的・全体的構造の制約を受け(あるいは影響を与える)側面について、Schegloff(1996)は対象人物のカテゴリ、聞き手の知識の想定が指示表現形式に反映することを論じ、Stiver(2007)は指示の有標性との関係から(e)の側面を論じている。

2. 研究の目的

本研究は、指示を相互行為によって達成される社会的活動とみなす立場から、会話参与

者はどのように指示対象の認識・理解を確立するのかを観察し、指示を確立する活動によって相互行為上どのようなことが成し遂げられるのかについて考察することを目的とする。具体的には、主に日常会話のストーリー・テリングで行われる人物指示(person reference)の分析を通して、

- 1) 会話参与者はどのように指示対象の認識・理解が確立するのか、
- 2) 指示を確立する相互行為がストーリー・テリングの達成にどのように貢献するのか、について議論する

1) について

須賀(2007a)では、日本語会話にみられる[1]のようなフォーマットによって行われる指示交渉に注目した。

- [1]X1: [フィラー] 〈名詞〉(が・って)あるでしょう?
〈聞き手の認識可能性を確認要求〉
Y1: うん 〈X1'への応答〉
X2: 《指示詞 (+名詞)》(が/に/を)・・・
〈指示対象に関する叙述〉

須賀(2007b)では、聞き手が知らない想定する対象を会話に導入する際にも[2]のような類似のフォーマットが用いられることを指摘し、〈名詞〉や《指示詞》が相互行為上どのような役割を担っているかについて検討した。

- [2]X1: [フィラー] 〈名詞〉(っていうの)があるんだ 〈指示対象の提示〉
Y1: あ そう 〈X1への応答〉
X2: 《指示詞》(が/に/を etc.)・・・
〈指示対象に関する叙述〉

その結果、

- ・ X1 の名詞に「名前(name)」と「描写(description)」のどちらの表現形式を選択するかは、聞き手がその表現によって対象を認識できると話し手が想定しているかどうかによる、
 - ・ 描写は、聞き手に指示対象の属性を想起させるよう促すことによって指示対象を理解させるのに寄与している、
 - ・ 話し手と聞き手の間で指示対象の認識・理解を確立することが会話活動の遂行に必要なコンテキストを作り出している、
- ということを観察した。

本研究では、日常会話のデータ・ベースを

さらに増やし、会話に伴う非言語行動にも注意を払うことによって、上記観察を検証することから始めることにする。

2) について

須賀(2008)では、話し手がストーリーを語る時、聞き手が知らないと想定する人物を本来言及せずに済ますことができる「名前」を用いて指示する有標な指示行為に注目し、それがストーリーの核心部分を語る上で重要な役割を担っている可能性を示した。

この現象は指示という活動が単に人物を指示的に指示するだけでなく会話全体の活動に貢献するような役割をも果たすことを示唆している。

本研究では、会話者間で指示を確立する活動がストーリーを語るという会話全体の活動の達成にいかに関与するかについて、さらに考察を深める。

3. 研究の方法

(1) 日常会話コーパスの構築

日本語の日常会話データを収集するため、協力者を募り、収録方法と人権保護対策について了解を得た上で、ビデオカメラを使って会話場面の撮影を行なった。撮影時間は30分程度、全体で2人会話を6組、3人会話を3組を収録した。(2人組の会話は、話し手がだれを受け手として想定しているかを考慮しなければならない問題を避けることができ、3人組の会話は、受け手として想定している人物からの反応が得られるかどうかなど、話者交替に関わる影響についてみる事ができる。)

初対面の人同士の会話が4組含まれるが、ある程度共有できるバックグラウンドを潜在的にもっている人同士によるものとした。それは、相手が持っている知識に関する想定が適切か否かを確認しないといけない状況が多く生じることが見込まれ、そのような環境で会話者はどのように指示対象の認識を確立していくのかを観察するためである。

協力者がリラックスして会話できるような収録場所を選び、会話者の非言語行動も観察できるように、ビデオカメラによる撮影を行った。撮影中は会話者以外の人物は立ち会わず、撮影後、人権保護の観点から削除すべきデータの有無について確認した。

収録した映像を Jefferson が開発した方法を用いて書記化を行なった。基礎的な作業は資料整理補助者に依頼した。

(2) 会話データの観察と分析

映像データとトランスクリプトを繰り返し観察し、次のような観点から分析を行った。

① 指示交渉のフォーマットとその構成要素について

- 指示交渉はどのような表現形式によって開始・終結されるのか
- 指示交渉中どのような指示表現形式(人物・事物・概念を表す名前か描写)が選択されているか
- その表現形式はどのような役割を果たしているか

② 会話参加者の非言語行動について

- ピッチに変動が起きているか
- 会話参加者の視線がどこを向いているか
- 体や手はどのような動き・ジェスチャーをしているか
- 言語表現と連動した特徴が見られるか

4. 研究成果

(1) 会話参加者が指示対象の認識・理解をどのように確立しているか、以下のようにまとめることができる。

① 知識想定に基づくデザイン

聞き手が指示対象を少なからず認識できると想定可能な対象を指示する場合、受け手デザインの選好と最小指示の選好に志向して「名前」が選択される。聞き手が指示対象を知らない想定される場合は「描写」の使用が選好する。その表現形式は、既存知識と結びつけて新たな対象を理解できるようにデザインされている。

② 指示表現形式の役割

「描写」による指示は、対象人物のカテゴリに関する情報を受け手に伝達することができ、聞き手に指示対象の理解だけでなくストーリーの内容の理解を促すのに寄与する。

③ ターン構成要素の役割

指示交渉では、名詞や指示詞のみならず、ターンを構成する要素が指示を確立する相互行為のリソースになっている。指示詞は、指示対象の認識に関わる側面だけでなく、指示交渉という副次的活動から本題行為に戻る(移る)ことを合図する会話進行上の役割を果たす。

④非言語行動について

話し手の指示表現の提示に連動した受け手のうなずきや視線合わせによって対象人物を認識・理解したことが示唆される。その反応は話し手が語りを先に進めるリソースとなる。

⑤聞き手知識の想定と指示交渉

聞き手知識の想定が適切であると判断された場合は、指示交渉を終えてストーリー・テリング活動に戻るが、聞き手知識の想定が適切でなかったと判断される場合は、さらに指示交渉を続行することがある。

特にストーリーの核心部分を語る前に、綿密な指示交渉が行われ、話し手は受け手が指示対象を十分認識できたと判断したとき、ストーリーの核心部分へと語りを進める。これは、ストーリー・テリングという活動を達成するために指示を確立することの重要性に会話が志向していることの表れとみなすことができる。

(2) 指示の確立の会話活動への貢献を示唆する①-③の現象に注目した。

① ストーリー・テリングの終盤での「名前披露」

「名前披露」とは、会話にすでに導入された聞き手の知らない人物の名前を後続の会話内で明らかにする行為である。この「名前」は登場人物の名前を聞き手に認識させるために披露されるわけではなく、むしろ、話し手が対象人物との関係をどのように捉えているかを聞き手に伝達するために用いられる表現形式である。「名前披露」は、会話をストーリー・テリングへの共同参加を導くという点で、会話全体の活動に貢献している。この指示現象は、単に指示対象を同定するためだけでなく、ストーリーのクライマックスを語るという活動を達成するために寄与している。

②ストーリーのパンチ・ラインを語る実演

ストーリーの語り手が過去に見聞した第三者の行動を粒度レベルを上げて登場人物の視点から語る行為を「実演」と呼ぶ。実演は、出来事についての語り手自身の評価を伝達するとともに、ストーリーのパンチ・ラインを聞き手に合図するという意味で、ストーリー・テリング活動の起動を方向付けるリソースになっている。

③直示表現の再使用

相手が直前のターンで用いた直表現の言語形式を話し手がそのままの形式で使用する指示行為（「再使用」）は、話者が異なる視

点をターン内に取り込むことによって指示対象についての話し手のスタンスを示すという点で社会的相互行為の一環として会話活動に寄与している。

以上の議論から、相互行為において指示を確立することが、聞き手に単に指示対象の認識や理解させるだけでなく、会話全体の活動の達成に貢献していることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文等] (計2件)

- ① 須賀あゆみ (2012) 「実演と笑いによる語り連鎖」吉村あき子・須賀あゆみ・山本尚子(編)『ことばを見つめて—内田聖二教授退職記念論文集—』英宝社、425-436. 査読無
- ② 須賀あゆみ (2010) 「会話における直示表現の『再使用』について」『人間文化研究科年報』第25号、13-23. 査読有

[学会発表] (計3件)

- ① 須賀あゆみ 「物語の終盤での名前披露—相互行為における指示の一面」筑波英語教育学会第31回大会における特別研究発表(招聘)、2011年6月18日、筑波大学.
- ② 須賀あゆみ 「実演と笑いによる語り連鎖」、社会言語科学会第26回大会におけるポスター発表、2010年9月5日、大阪大学.
(『社会言語科学会第26回大会発表論文集』178-181.)
- ③ 須賀あゆみ 「会話における直示表現の『最使用』について」社会言語科学会第24回大会における口頭発表、2009年9月20日、京都大学.
(『社会言語科学会第24回大会発表論文集』90-93.)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須賀あゆみ (SUGA AYUMI)
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50283924

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし